

Wolfgang KLUXEN : Philosophische Ethik bei  
Thomas von Aquin. Matthias-Grünwald-Verlag,  
Mainz, 1964. Sxxxv+244

岩 本 一 夫

著者は、1922年にベンスベルクに生まれ、Köln, Bonn, Löwen で神学と哲学を学び、その後一時、アメリカに哲学の客員教授に迎えられたが、1961年以後ノイスの教育大学(die Pädagogische Hochschule)の哲学教授となり、1964年以来、ボン大学哲学科 B-ab-teilung の主任教授として今日に至っている。ボン大学哲学科の abteilung は、B は中世関係を専攻とする。因みに、早稲田大学とボン大学との交換教授として今秋来日が予定されている。

さて、本書は、著者の師ヨゼフ・コッホ教授に捧げられたものであるが、その意図するところは、倫理学をトマスの総合的体系から抽出し、哲学的な学として確立することである。言い換えれば、トマスの体系における神学と哲学についての論議多き問題を、倫理の面で問い直すことでもある。そこでまず、本書の構成と内容を紹介した後、2, 3の問題を指摘することにした。

本文は1960年末には出来上がっていたが、その後の検討により、概論を最初に附加し、問題意識、方法等を明確にしている。本文は4部から成り、全体を通して14章に分けられている。

第一部は6章か成り、一般的意味における哲学的倫理学の諸問題が考察されている。第1章・第2章では、神学と哲学との関係から出発して、それに関連する普遍的諸問題が論じられるが、その際トマスの総合的体系の中で哲学が神学に対してその固有の領域と立場を保持していることが示される。第3章では、Handlungswissen, すなわち Synderesis, Gewissen, 特に Klugheit等の区別を通して、哲学的学としての枠内での倫理学の理論的規定が目指されている。倫理的哲学的認識は、「思弁的」「実践的」の本来的区別からも、また、その目的から考えても、「実践的」であることは否定できないが、例えば医学が観点によっては実践的でもまた思弁的でもあるように、哲学的倫理学の実践的性格は明確ではない。いわ

ば、in spekulativer Weise praktisch と言われる。そこで、第4章では、倫理学の方法・分類・区分が問われる。倫理学は、その対象として、「目的に向って意志的に行動する人間」を考察するものである。だが人間の実践的体験は、それ自身に固有の秩序を有するがゆえに、それに固有の実践的学すなわち哲学的倫理学が必要であるという。その限りで、倫理学が形而上学から導き出されるものでないことが、三つの観点から示される。そして、現世における人間の自己完成の道として、実践的領域では、行動と観照があるが、いずれも不完全な幸福しか獲得できない。そこで、第5章の「実践的学としての神学」の考察を経て、第6章では、現世において受けている制限と不完全な自己完成という事実自体が、哲学的倫理学に固有の意味と可能性を与えると述べられる。

第2部では、神学的立場からなされたトマスの総合的体系の中で、哲学的倫理学が、哲学的次元において一つの実践的学として展開するような中心点が探究される。実践的学としての倫理学は、人間が理性的行為の中で自己の Seinkönnen を実現し、自己の完成を可能な限り追求する人間を考察する。他方、神学は常に神の助けによって究極的目的すなわち beatitudo に向う人間が問われる。そこで、第7章では、神学大全 I—II. 1～5 の理解が試みられる。ここでは、現世における不完全な幸福ということは、神学的に分類されていて、その脈絡の中でしか立ち現われないので、その持つ意味が一般に見失われがちであることが指摘される。しかし、人間の全行為は、根源的究極目的を目指すものであるがゆえに、かえって現世における制限された不完全な幸福ということから哲学的倫理学の可態性が立ち現われるはずであると言う。従って、第8章ではこの究極的目的、すなわち至福と神を見んとする人間の自然的欲求 (desiderium naturale) が考察され、第9章では、「不完全な幸福」について要約される。その限りで、Tugendlehre が道徳上の要であり、哲学的倫理学がそれに向うべきことが指摘される。

第3部は、究極目的と自然的欲求の問題が当然要求する「善と悪」の考察に向けられている。その場合、善に関する超越的概念を有する形而上学との関連が論究の中心となる。行動に関する領域においては、形而上学的認識は実践的な認識を前提とし、それに従うことが示されている。まず、第10章・第11章では倫理的善と悪、倫理的秩序・倫理性の原理等の諸問題にとって重要なテキストである神

学大全 I—II, 18~20の解釈がなされる。第11章ではトマスの倫理性の原理の演繹が真に反省的な性格を有するがゆえに、倫理性の原理、基準としての理性が形而上学的認識との関連において考察され、これまでの論究の確認として、「自由」の問題が第12章で論じられている。トマスが、libertasではなく liberum arbitriumについて語る時、この語自体が示唆する如く、カントやサルトルらの所謂自由論(die Philosophie der Freiheit)とは、その問題意識を異にしていることは言う迄もないが、さらにトマスの総合的体系の倫理的側面も示している。実践的学としての倫理学は自由の本質や自由な意志決定そのものを問うのではなく、それを前提とする各行為が意志的である限りにおいて示される具体的制約を問うものであるという。従って自由の不明確性が結局この学の限界を同時に示すことにもなる。とは言え、この学は、道徳的生が外に現われた形に従い、最も具体的なものに基づくと同時に概念的普遍性において把握されるべきだと考えられている。

第4部では、第2部・第3部の終りの箇所では指摘していること、すなわちトマスの倫理学が徳論(Tugendlehre)であることが論じられている。まず第13章では、徳論が法の倫理学等の他のいかなる倫理学の形式よりも優れていることが示され、最後の第14章では、法と歴史性の問題が考察されている。法は、神学的脈絡にあっては連続的に個々に秩序づけられるが、哲学的次元では、一部は思弁的、一部は実践的領域へと分解される。そして、永久法、自然法の合法性が実践的認識に対して反省的関係にあることが示される。そして、トマスによっては唯示唆されているに過ぎない人間存在の歴史性の問題に対する展望が、徹頭徹尾実践的である実定法の考察で言及されている。

さて以上概観した如く、本書はトマスの総合的体系における神学と哲学の問題を倫理的領域に移し、倫理神学に対して哲学的倫理学の確立を意図したものと言ってよいと思うが、次に本書によって触発された恣意的問題設定を2・3述べることにする。

まず、トマス理解の重要な鍵の一つが、倫理的側面にあると思われる点である。トマスにおける存在と善の置換性の問題を考えても、その体系には、形而上学と倫理学の両側面の相入性が窺える。このことはキリスト教本来の特質に根ざすものとも考えられる。元来キリスト教は、人間以上の存在に関わるものであり、ト

マス神学の課題は、この点を中心として全存在者を整合的に体系づけることであったと思われる。倫理ということ人間相互にのみ関わるものと解するならば、キリスト教が優れて倫理的であることは否定できない。本書で “Praktishe Lebenserfahrung hat ihre eigene Qrdnung, und so auch praktische Wissenschaft”. (s.60) と言うとき、このことがその裏にあると思われる。所謂「超自然」とはこのことを指すものであろうし、そこからまた、die Faktizität der Freiheit des Willens も出てくる。そして、この意志の自由という事実性を踏まえて徳論にいたる過程は一種の必然性をもつであろう。その限りで、本書の意味と可能性を理解できる。しかし、「哲学的」ということにアクセントが置かれる場合は、別の問題が生じてくる。

「哲学」ということが言われる場合、それをを用いる角度によって、その内容を異にすることは例えば ancilla theologiae と言われる場合にはギリシア哲学が念頭に置かれていることから窺えるであろう。従って、問題は、トマス自身が総合的体系をどのように考えていたかである。仮りに、トマスにとっては、自分以外の立場の者には、自分の神学が同時にまた哲学でもあった、という言い方が可能であるとすれば、「哲学的」を強調することは、トマスの体系内では、一種の自己憧憬に帰することにもなりかねない。Summa Contra Gentiles IV の Prooemium に、被造物の自然的理性が神の認識にいたる上昇過程(via ascensus)と、神の啓示による下降の道(via descensus)は結局同じだと言っている。

「哲学」に対する考え方が、神学と哲学に関する問題の評価も変えるとはいえず、トマスの体系自体に即した問題意識と現代トミズムからのそれとは白ずから異なることを充分意識していることを付け加えておかなければならないであろう。その意味で、トマスの総合的体系を多角的に検討することは不可欠であり、本書の「哲学的倫理学」が一つの問題提起であり得ると思うのである。そして、このことは、ジャック・マリタンとの対比によって一層本書の特質が現われると思われるのであるが、その問題は、今後の機会に譲りたい。なお、本書に索引並びに参考文献一覧が付されていないことは残念に思ったことを付記しておく。